

明治・大正期の酒造工場が現代アートの美術館へ

—弘前れんが倉庫美術館／吉野町緑地周辺整備等 PFI 事業—

なり た れい こ
成田 麗子

弘前市 都市整備部 都市計画課 美術館周辺活性化室 主査(R5. 3. 31現在)

1 はじめに

弘前市は藩政時代以来約400年の歴史を持つ城下町で、青森県西部に位置する津軽地域の政治、経済、教育、文化などの中心都市として発展してきた。

現在でも、春は弘前公園に咲く日本一の桜、夏は300年の歴史を誇る弘前ねぶた、秋は生産量日本一のりんご、そして冬は一面が雪景色となり、四季を通じて様々な変化と表情にあふれた景観を生み出しているほか、市内には、明治・大正期に建てられた洋風建築物、近代建築の巨匠・前川國男氏の建築物など、多くの歴史的建造物が点在しており、年間を通して旅行客が多く訪れる観光のまちでもある。

「弘前れんが倉庫美術館」は当市初の美術館として2020年7月にグランドオープンした。明治・大正期に酒造工場として建設され、近代産業遺産

として長年まちのシンボルとなっていた「吉野町煉瓦倉庫」を新たに再生させたものである。

2 事業の背景

煉瓦倉庫のある吉野町は、JR 弘前駅と弘前公園の中間地点に位置し、商店街や繁華街にも隣接している。また、重要文化財に指定され五重塔としては国内最北の最勝院五重塔や、古くから山岳信仰の対象として津軽地域の人々の心の拠り所となっている岩木山を、煉瓦倉庫の前面にある土淵川吉野町緑地から望むことができ、当市の景観づくりやまちづくりにおいて重要なポイントとなる場所となっている。

酒造工場として使用されたあと、ほぼ遊休施設となっていた煉瓦倉庫を美術館にすべきという声が、民間団体を中心に1980年代から上がり、1990年代には当市も倉庫の取得に向けて動いた経緯があったが、当時は取得には至らなかった。

そんな中、煉瓦倉庫を会場として、当市出身の現代美術家である奈良美智氏の展覧会が2000年代に3回開催され、合わせて約16万人もの来場者が全国各地から訪れた。この展覧会の成功を契機に、煉瓦倉庫を美術館として誕生させようという機運が再び高まり、地元の経済・文化団体の後押しを受けて、当市が2015年に煉瓦倉庫を取得した。

これにより、歴史や文化を踏まえつつも、この場所を、新たに「人が集まり」「人が



写真1 弘前れんが倉庫美術館 ©Naoya Hatakeyama



活動し」「人が流れる」場所として再生させるため、官民一体となって取り組み、中心市街地における交流人口の増加や回遊性の向上による賑わいの創出を生み出す文化交流拠点として整備していくこととなったのである。

3 整備の基本方針

事業を開始するにあたり、2015年に美術に関する有識者や公募市民からなる「吉野町煉瓦倉庫・緑地整備検討委員会」を立ち上げ、ここでの意見を基に「(仮称)吉野町文化交流拠点基本計画書」を策定し、整備や管理運営の基本方針を定めた。

基本計画書では、施設のコンセプトとして「訪れる人全てが世界につながる芸術や文化に触れることができる機会を提供しつつ、次世代のアーティスト・クリエイターが育つ文化芸術の創造・交流の拠点(クリエイティブ・ハブ)になることで、市民の豊かな生活・新たな賑わい・市内外の集客と交流を創出し、持続可能な都市への発展に寄与する」を掲げている。

また、施設整備の基本方針は、長く市民に親しまれてきた煉瓦倉庫の外観や内部空間を可能な限り活用しながら土淵川吉野町緑地と一体的に整備することとし、施設の機能としては、弘前の歴史や文化に根差した美術作品に触れることができるアート展示機能、市民等による様々な文化芸術活動を促進する市民活動交流機能、多くの人々が自然に集まるような賑わい創出機能を導入することとしている。

4 PFI 事業としてスタート

本事業は、施設等の設計、建設から運営、維持管理といった業務を包括的に発注し、民間事業者



写真2 整備前の煉瓦倉庫

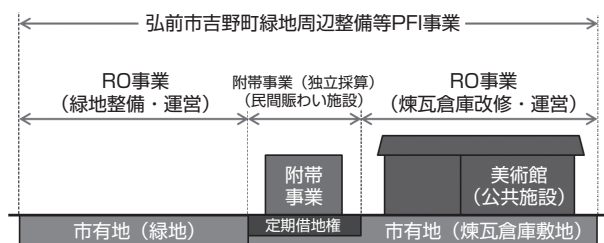


図1 PFI 事業の概要

■ 事業日程	
設計期間	2017. 7. 1～2018. 3. 31
建設工事期間	2018. 5. 1～2020. 2. 28
開館準備業務期間	2017. 9. 1～2020. 3. 31
供用開始日	2020. 4. 11 ※
運営・維持管理期間	～2035. 3. 31(15年間)

※美術館は2020. 7. 11グランドオープン

表1 事業日程

のノウハウを幅広く活用することで、より質の高い公共サービスの提供、整備費の縮減、維持管理の効率化というメリットが見込まれることから、当市で初めて PFI 事業により実施している。

事業者の選定にあたっては、公募型プロポーザル方式により実施したところ、2 グループから応募があり、2017年には、スターツコーポレーション(株)や地元企業など計8社で構成された特別目的会社である弘前芸術創造(株)と18年間に及ぶ PFI 事業契約を結び、いよいよ事業がスタートした。

5 整備内容

本事業において建築設計を手掛けたのは、フランス・パリを拠点に活動する建築家の田根剛氏である。旧ソ連の軍用滑走路を利用して建設されたエストニア国立博物館や、2036年に完成予定の帝国ホテル東京新本館を手掛ける建築家である。

田根氏は建物の歴史について徹底的にリサーチした上で、築100年にも及ぶ煉瓦倉庫の耐震性を高めつつ、残せるものは可能な限り残す「記憶の継承」をコンセプトに改修を行った。

具体的には、煉瓦倉庫全体に使用されている煉瓦は約25～30万個あるが、改修にあたり新たに使用された煉瓦は約1万5,000個、全体の約6%にあたり、ほぼ100年前の煉瓦をそのまま使用している。建物の耐震性を高めるため、煉瓦壁内部に高さ9mのPC鋼棒を挿入する工法を取り入れるなど、建物の美観を損なわない施工を実現した。

また、美術館は「ホワイトキューブ」と呼ばれる真っ白な展示室が一般的であるが、当館では五つある展示室のうち、ホワイトキューブの部屋はただ1室。残りの4室は創建当時から使用されていたコールタールの黒い壁をそのまま残し、施設

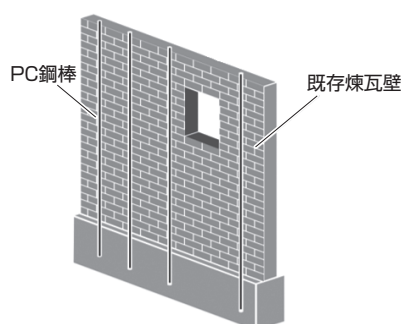


図2 PC鋼棒による煉瓦壁補強イメージ

固有の空間性を守っている。

そして一番の特徴は、「シードル・ゴールド」と名付けられた、金色に輝くチタン製の屋根である。りんごを発酵させてつくられる「シードル」は、現在りんご産地を中心に様々な場所で製造されているが、日本で初めて大々的にシードルを製造した場所が、美術館になる前のこの煉瓦倉庫だった。当初、日本酒を製造していた煉瓦倉庫は、1950年代に入るとシードル工場となり、1960年代まで製造が続いた。この記憶を継承していくため、トタンだった屋根をあえてチタン製とし、光の反射により変化する鮮やかな色彩の屋根をシードルの色に見立て、美術館の新たなシンボルとした。



写真3 シードル・ゴールドの屋根 ©Naoya Hatakeyama

6 施設概要

美術館の名称は、古くから「煉瓦倉庫」として、地域で呼び親しまれてきた場所の記憶と歴史を、建築とともに未来へ継承したいという想いのもと、「弘前れんが倉庫美術館」とした。また、同時代の文化芸術のための美術館であることを世界に発信するため、英語表記は「Hiroasaki Museum of Contemporary Art」とした。



美術館は地上2階建てで、五つの展示室のほか、イベントやワークショップなどで利用できるスタジオが3室、一般の利用者が絵画などの展示ができる市民ギャラリーのほか、現代美術や郷土作家に関する書籍の閲覧、勉強などに利用できるライブラリーを設置している。

隣接するカフェ・ショップ棟は、運営する弘前賑わい創造㈱と事業用定期借地権設定契約を締結し、当該会社の独立採算となっている。改修にあたっては、明治期の建物で相当老朽化が進んでいたため、建物正面の煉瓦壁以外は新たに建て替えられたが、煉瓦倉庫の雰囲気や継承した建物となっている。カフェとミュージアムショップのほか、シードルのタンクがずらりと並ぶシードル工房があり、ここで製造されたシードルをカフェで飲むことができる。

7 コロナ禍での美術館運営

コロナ禍にオープンした美術館は、2020年度、2021年度と入館者数、利用料金収入ともに開館前に想定していた数字とは程遠いものであった。地域のクリエイティブ・ハブを目指していく一方で、一部利用料金制による事業スキームであるため、インバウンドや県外からの観光客が思うように訪れず悶々とする日々が続いた。「市民のため」という原点に立ち返り、当市ゆかりの作家の展覧会や、市民が参加しやすいイベントを実施するなど、市民に何度も足を運んでもらえるように取り組んでいる。

開館から3年目の2022年度からはようやく県外からの観光客が少しずつ増え始め、一度訪れた方がSNSで発信し、それを見てはるばる訪れる方も多い。また定期的に「建築ガイドツアー」を実施するなど、建築物としての魅力も発信し、新たな顧客獲得に努めている。



写真4 三つのスタジオとライブラリー



写真5 シードルのタンクが並ぶカフェ

今後は「エリア・アート・マネジメント」として、市内の他施設、イベント、祭り、アート活動等と連携した取組みを進め、一体的な賑わいづくりと回遊性の向上を図るとともに、県内に五つある美術館と連携し、青森の風土や歴史、文化を感じていただくような取組みも行っていきたいと考えている。

明治・大正期の建築物を改修し、最先端の現代アートを楽しめる美術館に再生し、これから市民を始め、多くの方々に末永く愛される美術館を目指していくとともに、美術館を中心に「人が集まり」「人が活動し」「人が流れる」場所として、まちなかに賑わいを創出していきたい。